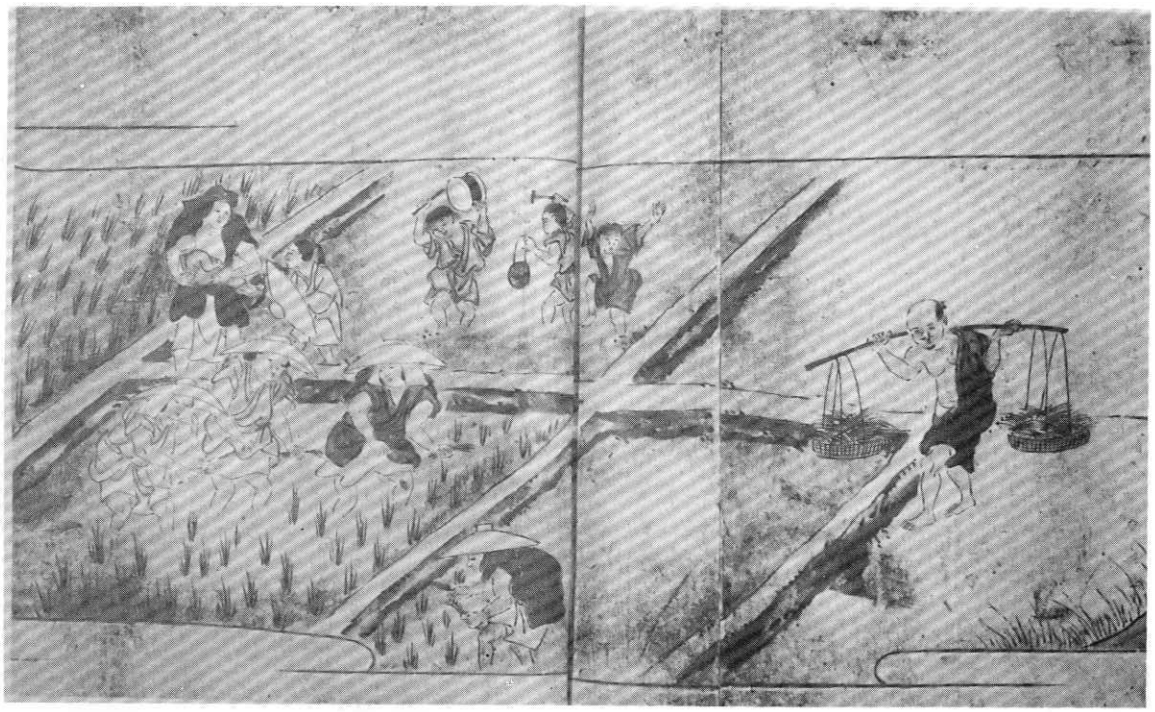
三　島　市　　（通巻第６号）

郷土館だより

Vol. Ⅱ No. 3
1980. 4. 1



田植図（たはらかさね耕作絵巻より）

目　次

沢地地区の民俗をたずねて(3)…… 1
郷土史の散歩道(6)…… 3
資料紹介…… 5
行事報告…… 6
行事報告・おしらせ・その他…… 7

郷土館フィールドワークから

沢地地区の民俗をたずねて(3)

館員（学芸員）　杉村　斉

路傍の石の民俗文化財

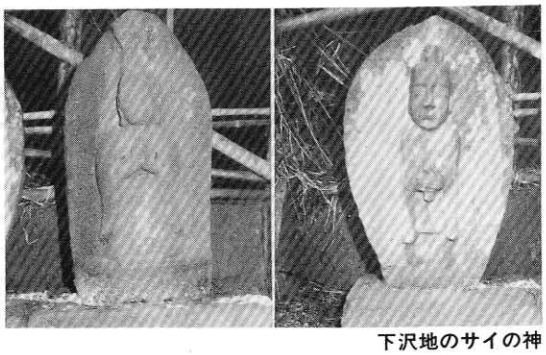
旧沢地村を縦断している沢地道を歩いてみると途中数箇所の石造物を見つけることができる。昔からの村落に入ってみれば、どの村でも、だれもが容易に見つけられるものではあるが、普段はそれを見過したり、或いはまったく注意を払わなかったりしてしまうものである。

今回は、こうした石造物に注目して、それが何の目的で、いつごろ、だれの手によって建てられたかなどを、土地の人に聞いたり、丹念に石造物を観察したりしてみようと思う。

土地の人でさえもすでに判らなくなっているものも多いが、この石造物が語ってくれるものは、正確な村の歴史であり民俗である。一つの石碑の意味と由来を知り得た時、その石の前に立ってみれば、村への関心がより以上に親しく深まっているにちがいない。

下沢地のサイの神

沢地小前の信号から富士ビレッジ・千枚原方面へ登る坂道の途中に、二基のサイの神がある。浮彫の単神立像で、一基は合掌像、他の一基は笏を持ち、変った冠を付けている。二基共に身長の割合に頭が大きく、三頭身とでも言うだろうか、ユーモラスな姿である。合掌像は貞享四年（1687）のもので、三島市内では最も古いサイの神の一つである。



下沢地のサイの神

この道は元の沢地本通で、三島から一丁田村を経て沢地村へ入る村の入口であった。サイの神様は、ここに立って、村へ侵入する疫病などを防いできたものであろう。

庚申塚

龍沢寺入口を少し過ぎた所に、右側の田の中に入る小径があり、その先に村の人が庚申塚と呼んでいる場所が見つかる。庚申塚には庚申塔・巡礼供養塔・唯念名号碑がまとまって建っている。

巡礼供養塔

庚申塚にある石造物の中で最も多いのが巡礼供養塔である。全部で四基ある巡礼供養塔は下記のようなものであった。

(1)西国三十三所・信濃善光寺・四国八十八所
(2)横道
(3)西国・坂東・秩父・駿豆横道　（享保12年）
(4)西国・坂東・秩父・横道　（正徳２年）

巡礼供養塔

巡礼供養塔は、村の信仰の歴史を語るものである。閉ざされた地域社会で一生を送らなければならなかった多くの民衆にとって、巡礼による外界への旅は村をあげての一大行事であったものだろう。講を組織し、巡礼先を決め、農民は札所巡りの旅へ出立していった。その目的は信心による祈願成就はもちろんだが、未知の世界に対するあこがれは更に強いものであったのかも知れない。一つの巡礼を終え、帰村後には供養塔を建て、旅の記念の碑としたものである。巡礼が盛んだったのは江戸中期頃だったようだ。この地方で最も古い供養塔は貞享年間のものがある。

巡礼供養塔の中で多いのは、駿豆横造の地方霊場巡りである。横道巡礼は西国・四国などの全国的巡礼よりかなり遅れて発達したものであるが、手軽さが受けて、かなり盛んに行なわれたようである。駿豆横道三十三所巡りの一番札所は三島の

白滝観音であり、札留は静岡大内の霊山寺であった。伊豆・駿河を横断するもので、七泊八日くらいを要したと言われる。

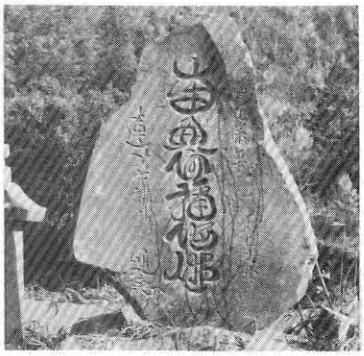
唯念名号碑

唯念名号碑は、駿東・相模・伊豆・甲斐地方に集中的に数多く見られる。自然石に「南無阿弥陀仏」の六文字を独特の書体で刻みこんだ石碑は、村の辻や村境にかなり目立つ姿で建っている。

唯念は寛政二年（1790）肥後国八代に生れ、青年時代を下総国・蝦夷地で修業励み、天保年間に至って北駿の上野奥の沢に道場を定め、近隣の村々を回って布教したと伝えられている。唯念の、念仏三昧の、しかも世俗の利徳にかかわらない生活態度は、次第に民衆の心を握み、念仏講は各地に確実に浸透していった。

現在沢地で行なわれている念仏講は、月次（つき）念仏と日次念仏の二種類がある。おばあさん達の集りである。

沢地の唯念名号碑は、唯念の没する二年前、明治11年（1878）のものであった。



唯念名号碑

庚申塔

庚申信仰は、干支の庚申（かのえさる）の日に行なわれる信仰行事である。中国の思想が日本に渡来し、奈良時代には、一時宮廷で信仰された。中世に至り、仏教等と混合し、民間で盛んになった。

中国の道教は、人間の体内にいる三層が人間の早死を望んで庚申日に人が寝ている間に体内を抜け出して天帝にその罪過を告げ、その結果人は早死させられるので、長生きするためには庚申の日には身を慎しんで徹夜をせよと説いた。

民間で庚申信仰が盛んになると各地に庚申堂が建てられ、庚申講が組織された。沢地の庚申塔は、天和二年（1682）に講が組織され、建てられたものである。近くの老人に尋ねてみたが、明治生れの人だが、庚申講については何も知らないと言っていた。ただ、縛り庚申の風習があって、村で盗難があった時は、庚申さんを縄で縛って祈願したと聞いた。

庚申塔

上沢地のサイの神

浄土宗誓縁寺に入る手前の道わきに、双神のサイの神がある。双神の二体は、男女神であり、稚拙は彫刻ながらそれが性神であると判る姿をしている。双神像の本場は長野県である。静岡県でも駿東の北部には多く、長野形式の流れを思わせる。三島には、佐野藍の沢と上沢地の、たしか二基のみである。

サイの神には、塞の字をあてる防疫神、幸の字の福神、子供の神、夫婦和合の神など、地方によって異なった性格をもって信仰されている。もっとも一般的な、何でも聴いてくれる神であると言える。

上沢地のサイの神には、年号も記録も残っていないので、いつ、何の目的で建立されたかは不明だが、あれこれ想像してみると面白い。

上沢地のサイの神

沢地には、以上の石造物の外にも、誓縁寺の眼洗地蔵・馬頭観音像等がある。ぜひ探訪して見られることをお勧めします。

郷　土　史　の　散　歩　道　(6)

問屋会計諸勘定諸払帳

館長　長谷川福太郎

これは、天保２年(１８３１)９月１５日から、同年１２月３０日までの、三島宿会計決算の報告書である。（天保３年６月に行なわれた）

これに依ると、この期の総収入は１１８６両１分１朱と銭４９０文で、総支出は１１３５両１朱と銭５７６文、差引５１両２朱と銭７４４文残と記録されている。

一見、まことに健全財政であるかのように思えるが、よく見ると、収入総額の３７％に当たる４２１両が、実は借用金になっている。

これについては、宿３役（問屋・年寄・名主）も頭を痛めていたとみえて、特に巻末に下記の抜き書きを付けて、注意を促している。

前書の内書抜

1.金３４１両２分也　御拝借金（幕府より）
1.金５０両也　愛染院より借用
1.金３０両也　塚本村惣右衛門より借用
1.金５０両也　韮山御役所より当座拝借
〆金４７１両２分也
内金５０両也・韮山御役所より当座御拝借金・辰２月中御返上。
差引金４２１両２分　全当時借用に相成候分

と、責任者年寄源兵衛は訴えている。

さて、この４２１両２分は、この期の借金であるが、実はそれ以前に、「類焼拝借金」を始め、幾多の累積借用金のあることが、出金の部の支払内譯に依ってよくわかる。たとえば、

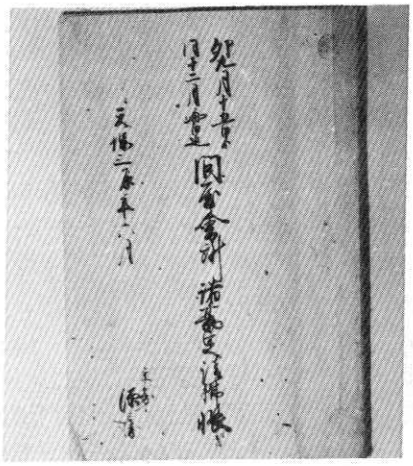
1.金２８両也　塚本村惣右衛門方元利共返済
1.金９２両３分銭３３８文　鹿島屋方年賦金
1.金３４両２分　鹿島屋より寅１２月借用金２３０両利息
1.金１１両１分２朱　愛染院借用元利共
1.金１両１分２朱銭168文　林光寺借用金利息

などがそのよい例である。したがって借用金の元利返済の額は２３０両となり、全支出金の２０％を占めている。（類焼拝借金については、４０ケ年賦分として８１両余が集金されているが、返済はされず収入金として流用された）

これについては、東海道筋の他の宿場との比較資料がないので、何ともいえないが、ずい分苦しい財政であったと思われる。

そのためか、宿の吏員に対する給料手当も、何かとやり繰りに苦心している趾が見える。

そうした、しわ寄せを受けてか、問屋（現在の市長と駅長役に当たる）林平は、給料滞り分の内金として６両を受け取っている。また同人取替金（立替金のことであろう）の内金として、２両２分が記録されている。



三島宿問屋会計決算書表書き

○４町宿

さて、支出金の中で目をひくのは、

1.金４３両３分２朱と銭２貫８３２文　大中島町・小中島町助成金
1.金３４両３分と銭６３２文　町町助成金

である。これがどのように使用されたかは、全然不明であるが、大中島・小中島両町への助成金が格段に多額になっている。また別筆に、

1.金４両也　四町袴着料

というのがある。これは明らかに大中島・小中島・久保・伝馬４町への祝儀である。

さらに、逼迫財政の中にあって、

1.金30両也　大中島町・小中島町貸付金

此訳、２０両は小中島町・１０両は大中島町と記録されている。

もともと、三島宿はこの４町を主体として構成された宿場である。したがって宿の経済はもとより、すべての宿の活動もこの４町に負う所が大であった。しかし、それにしても、４町・ことに大中・小中の重さがひしひしと感じられる。

○進物・酒肴・宿礼

1.金３５両２朱と銭４１５文
　　所所進物・併に酒肴・その他小払
1.金１１５両１分２朱と銭３０文　宿礼足銭

この進物や酒肴や礼金が、どのように提供されたのか明細はわからない。しかし、それが今日的な贈賄としてでなく、正当な交際や施政として公認されていたものである。義理・人情のきわめて厚かった当時の世情（大岡裁き的な）が、こうした習慣を生んだものであろう。

人情といえば、次のようなこともあった。

1.銭３貫６４８文
　　小使金左衛門事病身に付き暇遣し候所
　　給金先納有之候得共、勘弁銭遣し候

つまり、使丁の金左衛門が病身のため退職した。ところが、金左衛門には給金が先渡しになっていた。しかし病身であったので、あえて返納させることなく遣した、というのである。

○神祭り

1.金１分也　　茅町秋葉山へ寄付
1.金２分と銭１貫５２４文
　　秋葉講に付町々町頭酒代定例遣す
1.１貫５００文　山神講喰料十人の者定例遣す

江戸時代も現在と同じように、三島は夏祭りが多かったので、９月以降の神祭りとしては上記の２つが主なものであったと思われる。

祭礼は重要な施政の一環である。したがって、こうした支出が、宿会計の定例になっていたものであろう。

ことに依ると、前述の酒肴料は、１１月行なわれた三嶋大社の酉祭りに、当てられたものかもしれない。

決算書巻末署名

○財源捻出

何時の世も同じことで、為政者の最大の苦心は財源の捻出である。先ず収入のトップに、

1.銭１０６３貫４７９文　３割増取立高

と記されている。３割増とはまことに思い切った増税で、宿民の説得に大骨を折ったことであろう。

以下は収入欄に見える、苦心の趾である。

1.金１０両也　　質屋仲間益金
1.金５両也　　飯売子供益金
1.金２分と銭３貫文　新町口銭
　　是は商人荷物宿内出口出口にて取立候分、先年より請負人有之、一か年如此にて仕切置候分
1.銭６貫１００文　芹屋久右衛門方口銭
　　是は信州荷物久右衛方にて取次致候に付口銭、尤年々増減有之候
1.金１両也　　古着屋仲間益金

ところで、上記の飯売子供というのは、具体的にどのような売り方をするのか、よくわからない。たぶん、旅客相手の飯売りであろうから、街道のにぎやかな春夏の頃は、相当な益金を挙げたものと思われる。

とにかく、子供が宿の財源に一役担っていたことは、現在では容易ならざることである。

資料紹介

昭和54年度寄贈資料紹介

No.	資料名	氏名	町名	No.	資料名	氏名	町名
1	金庫	松井 克誘氏	大社町	16	三島市誌上巻	市立東小学校	東町
2	飯盒かけ	川口 一三氏	幸原町	17	みの	大庭 二郎氏	佐野
3	国分寺瓦片	国分寺	泉町	18	雛人形	神戸 津秋氏	本町
4	石板	中川 英明氏	韮山町	19	鞍	高田竜太郎氏	佐野
5	米櫃	吉田 庄三氏	東町	20	田ころがし	〃	〃
6	荷車	伊沢 憲一氏	函南町	21	養蚕用具	〃	〃
7	祝儀用米櫃	小野 善輝氏	北田町	22	囲炉裏用具	〃	〃
8	〃	〃	〃	23	ざる	〃	〃
9	天秤棒	〃	〃	24	ブラザーミシン	西山 房吉氏	大宮町
10	消防装束	高田 洋行氏	加茂川町	25	木鉢	榊 春男氏	徳倉
11	〃 はんてんはっぴ	〃	〃	26	桶	〃	〃
12	〃 はらがけ	〃	〃	27	小浜池の写真	早田 皓氏	泉町
13	〃 ももひき	〃	〃	28	連水俳句	阪野 要作氏	中央町
14	〃 頭布	〃	〃	29	連水俳画	〃	〃
15	〃 はっぴ	〃	〃	30	三嶋駒	鳥居さき子氏	大宮町

新資料の紹介

連水の句と俳画

寄贈していただいた多くの資料の中から、連水の句と俳画を紹介致します。

伊豆佐野（現・三島市佐野）の名主勝俣猶右衛門は、滝の本連水と号し、地方俳諧の中心的存在であった。天保３年に生まれ、安政５年25才で佐野村名主役となり、明治31年に没する67年の生涯において、彼は多くの俳句・俳画を作った。沼津の俳人種玉庵連山に師事し、師の掲げていた「俳関」の称号を継いで、伊豆佐野の連水邸は門人や俳友が立ち寄り逗留する所として賑わったといわれる。

文化的、教育的レベルの低い時代にあって、連水のような農民俳諧人の活躍は、地方文化の普及に大いに貢献したものと考えられる。また、連水が残した俳句には、生活に根づいたもの、気候風土を詠んだものなど種々あって、幕末から明治にかけての農村風景を鮮明に伝えていて、その意味においても価値は高い。

現在郷土館では、佐野の勝俣家から寄贈された連水ゆかりの「勝俣文庫」を所蔵し、その整理の作業を進め、連水の俳句、俳画とともに展示公開することを目指している。

連水の俳句

俳関の額

行事報告

～体験講座「おかざり作り」の報告～

お正月には、自分で作った“おかざり„を飾ってみよう！ということで、市内でおかざりを作っている芹沢貫一氏を講師に招いて、昨年12月16日(日)に開催されました。

当日は、26名の参加者が熱心に講習を受け、藁切断機や藁すぐり機を使って藁を選り、受講者は床に座り込んで手と足を器用に使いながら、環飾り、三尺、宝船、荒神飾りなどを作りあげていきました。

飾り付けの材料には、橙々・ウラジロ・譲り葉・おしめ（紅白）・連隊旗などが使われます。

郷土館一階会議室にて「おかざり作り」講習会

「初午幟作り」に参加した市内の児童たち

～体験講座「初午幟作り」の報告～

1月27日(日)　受講児童は、市内の各小学校生徒（6年生）男子7名・女子15名の計22名でした。

赤・紫・緑・黄色の順に4枚の紙を貼り合わせて作った旗に太筆で字を書いた。子供たちは、慣れない手付きで竹を小刃で切ったり、穴をあけたりして幟を作りました。中には指を少し切ったりした児童もいましたが、楽しい講習会だったようです。

自分の手で物を作る楽しさ、そんな素朴な喜びを多くの子供たちにも味わってほしいと思います。

～昭和54年度「古老に聞く会」報告～

今年の古老に聞く会は、3月6日（木）、郷土館会議室にて行なった。調査対象地区は幸原で、土地の7名の古老に来ていただき、興味深い昔話しをたくさん聞くことができた。今年で6回目の会となるが、これら会の内容は郷土館で記録、整理をし、活用してゆきたいと思う。

会に出ていただいた7名の話者

岡ノ谷悦雄氏	幸原町1丁目11－43	71才
斉藤　寛一氏	〃　2丁目20－1	78才
中野　かく氏	〃　1丁目9－25	76才
野知　たね氏	〃　2丁目2－22	77才
野知伴次郎氏	〃　2丁目12－35	71才
星野宇太郎氏	〃　1丁目10－16	77才
湯川　浩　氏	〃　2丁目5－20	71才

郷土館一階会議室にて「古老に聞く会」

行事報告

～テーマ展「郷土の染と織」の報告～

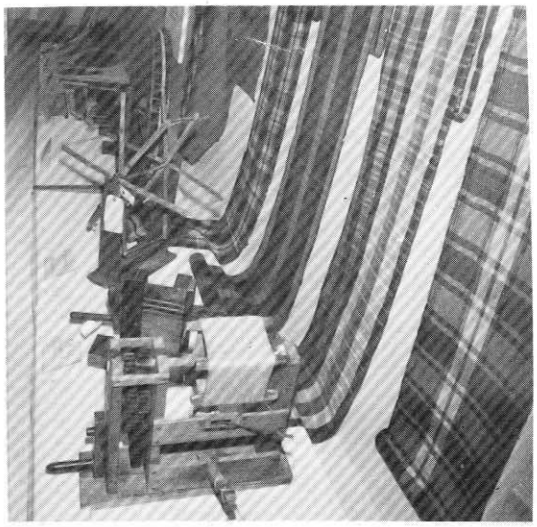
会期中の入館者数

	学生(小中高)	一　般(個人)	団体(30名上)	計
11月(15日より)	556人	1,284人	478人	2,318人
12月	822	1,894	388	3,104
1月	2,143	3,784	86	6,013
2月(2/15まで)	1,019	2,037		3,556
計	4,540	8,999	952	14,491人

昨年11月15日にオープンしたテーマ展は、２月15日をもって無事終了することができた。貴重な資料を快よく御出品くださった方々には、心から御礼を申し上げる次第である。

豊かで清冽な水に恵まれた三島には、一昔前まで多くの紺屋とその下職の店があって、近郊農村で織られた手織りの布を染めるなど、繁盛していた。農村では、農家で養蚕が盛んに行なわれ、生糸になる繭を出荷し、家庭では残り繭で晴着を織っていた。

今回のテーマ展では、こうしたふるさとの伝統や産業を想い起し、再現してみた。展示に関連させて行なった体験学習「草木染め」は、祖先達が生み出した知恵と技術を追体験してみて、少しでも継承したいと考え、行なったものである。



テーマ展「郷土の染と織」の展示

★★★★★　お　し　ら　せ　★★★★★

■郷土館の行事予定■

○５月27日（日）体験講座「草木染め」
○５月13日（水）県外歴史探訪甲州めぐり
　「武田信玄」歴史探訪
　山梨県立美術館にてミレー美術展見学
　５月10日（土）オリエンテーションを行なう
　（申込受付は５月１日より）
○５月25日（日）体験講座「玩具作り」
○７月１日（火）～12月26日（金）
　テーマ展「道」
　※申込、問合せは郷土館まで

■刊行物案内■

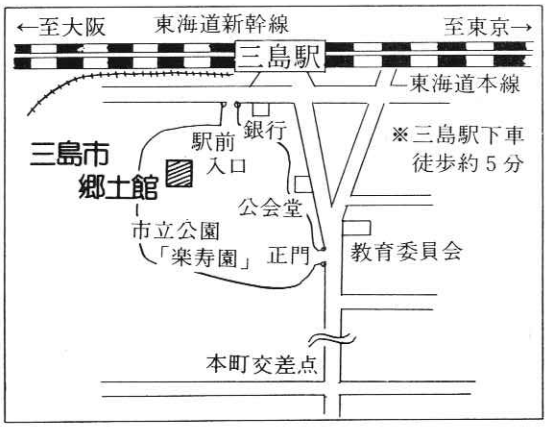
○三島小誌(四)「戦国の争乱」４月発刊予定
○「ふるさと探訪５０選」　４月発刊予定
○テーマ展「郷土の染と織」　〈領価〉 100円

■編集後記■

春の日差しを受けて　色々な感覚が炸裂する季節
そんな季節を待ち佗びるように
　親しい人の口から洩れた言葉
誰よりも　精一杯に生きた人
誰よりも　精一杯に生きた人
いつの間に　自らが酷く悲しくて……　（吉川）

利用案内

休 館 日　毎月第１月曜・12月27日～１月２日
開館時間　午前９時～午後４時30分
入場無料　（但し、楽寿園入園の際、有料）



郷土館だより No.6
昭和55年４月１日発行
（年３回発行）

編集・発行　三島市　郷　土　館
住所 〒411　三島市一番町19－３
TEL　0559－71－8228